



時代物のワイン



川路 新吉

時代物のワイン

階段を降りると奥まで続く棚にぎっしりと並べられたワインのボトルが目に入ってきた。

「すごいですね」

あまりの光景に圧倒されて、ぼくの口からは陳腐なほめ言葉しか出てこない。

それでも蔵の主人は、自慢のコレクションをほめられてうれしそうだ。

とあるバーで出会ったこの主人と意気投合し、ワインをコレクションしていると言うから見に来てみたのだが、まったく想像を超えるものだった。

「何か飲んでみますか」

「いいんですか？」

「ええもちろん。何かお気に召したものはありましたか？」

周りを見回す。どこを見てもワインのボトルばかりだ。いまだかつてこれほどのワインに囲まれたことはない。

「すみません。あまりワインには詳しくないんです。なにかおすすめてはありますか？」

正直にそう告げると、主人が質問してきた。

「いまおいくつですか」

「歳ですか？先月三十歳になりました」

ぼくの答えを聞くと、主人は少し奥の方の棚へ向かい、ちょっと探したすえに棚から一本のワインを取りあげた。

丁寧な手つきでボトルをぼくの方へ差しだす。そのラベルにはぼくの生まれた年が記されていた。

「ぼくと同じ年のワイン」

ぼくの言葉を受けると、主人はうなずき、なれた手つきでコルクを抜き、どこからか取り出したワイングラスに注ぐとぼくに手渡した。

グラスを受け取り、見よう見まねで香りがかぐふりをして、そして飲んだ。

その瞬間、衝撃が頭を突き抜けた。

なんだこれは！

口の中では芳醇な香りが次々に押し寄せては、まるで爆発している。それはとどまるどころを知らず、まるで生き物のようにならんでいる。ぼくの口の中はあっという間に強烈な生命力であふれた。

やっとの思いでワインを飲み込みむと、無意識に深い息をはいていた。まったくもって圧倒されてしまった。

「何なんですか？このワインは」

「驚かれましたか」

主人はしてやったりといった顔をしている。

「今までに飲んだどんなワイン、いやどんなお酒よりも刺激的なのにまるで柔らかな光に包まれたような優しさもあって」

「まあまあ落ち着いて。実はうちのワインにはちょっとした秘密があって」

「秘密ですって？」

「ええ。ラベルに製造年が書かれていますよね。」

「ええ、ぼくの生まれた年が」

「うちのワインを飲んだ人は、そのころの記憶、感情を味わうことができます」

「製造年の記憶を味わうことができるのですか？」

「そう。そして、いまあなたが飲んだのは、ご存じの通りお生まれになった年のものです」

つまり、いまワインを飲んで味わったのは、ぼくはいま、生まれたときの記憶、感情を味わったということか。

当たり前だが、当時のことなど全く覚えてはいない。だが、母親の胎内から外界に出てきたときのインパクトはすさまじいものだったに違いない。

少し信じられない話だが、それならば、これほどに強烈な生命力を感じたというのもうなずける話ではある。

「すごいですね」

ぼくの言葉に主人は笑った。

「ありがとうございます。ほかの年のものも飲んでみますか？」

主人の言葉に甘えて、ほかのものも試してみることにした。まだ完全に信じきれていないということもあった。

さて、いつのワインを飲んでみようか。

ぼくは迷ったあげく、ぼくが中学二年生だった年のものをリクエストした。

主人はすぐにボトルを探し出し、それをグラスに注いだ。

少し緊張して、差し出されたワインを口にする。

すぐに口の中に、甘くそして切ない味が広がった。鼻に抜ける香りは早春のそよ風に似ている

。

それは、ぼくが人生で初めの恋をした年だった。

思いを寄せていたあの娘を思い出す。澄んだ目をしたあの娘はいま何をしているだろうか。

「いかがですか」

主人の声が、遠く甘くそして少し苦い記憶からぼくを引き戻した。

「おいしいです」

ぼくは、記憶の中で見られていたように感じて、照れながらそう返すのが精一杯だった。

主人の言ったことは本当だったようだ。

ピリリリと主人の携帯電話が鳴った。

「もしもし。…ああ、わかった。すぐ行くよ」

主人は電話を終えると、ぼくにあやまった。

「すみません、ちょっと上に行かなくてはならなくなりました。すぐ戻りますから、それまでご

自由にごらんになってください」

そういうと主人は蔵から出ていった。

主人が蔵から出て行くと、ぼくはお言葉に甘えて詳しく見学してみることにした。

本当にすばらしいコレクションだ。その本数もさることながら、整然と年代ごとに棚が並んでいる。

いつかはぼくもこんな蔵をもてるようになりたいものだ、と思いながら見てまわっているとある棚の前でふと足がとまった。

「ん？」

最初は見間違いかと思った。しかし、何度見てもそれは間違いではなかった。

その棚にあるボトルのラベルにはすべて未来の日付が記されていた。

未来のワイン、ということだろうか。

ひょっとして、飲むと未来のことがわかるのだろうか。

自由に見てていいとは言っていたが、飲んでいいとは主人は言っていない。

しかし、ぼくは好奇心を抑えきれず、その棚から一本ボトルを取り出した。そのボトルには五年後の日付が記されている。

ボトルからコルクを静かに抜く。できるだけコルクに傷を付けないようにして。

コルクがポンという音と同時に抜けたとき、思わず周りをうかがった。周りに誰もいないことを確認する。

静かにワインをグラスに注いだ。

注ぎ終わると、口にする前にコルクをボトルひねり込み、もともとあった棚に戻した。

果たして五年後のワインはいかなる味がするものか。

いま一度周りを見回してだれもいないことを確認してから、一口ワインをすすった。

「なんだこりゃ」

思わず首を傾げる。

何かの間違いかとグラスの中の液体を照明にすかして見てみてみたが、そこにしっかりと濃厚な赤い色をした液体が入っている。

どうということだろう。

ワインはなんの味もしなかった。

たしかめるように今度は先ほどよりも思い切りよく、ごくごくワインを口にしてみた。

しかし、やはりそれは何の味もしなかった。まるで空気を飲んでいるような感じ。

なんだ、いたずらか。

よくよく考えてみれば、今から五年後のワインなんてあるはずがないのだ。

おそらく主人の手の込んだいたずらなのだろう。

やられてしまった。ひょっとしたらどこからかぼくの様子を見て笑っているかもしれない。

ぼくはグラスに残ったワインをもう一口飲んだ。

不思議だ。水ですらもう少し味がするものだ。やはり何の味もしない。強いて言えば、ほんの少しだけ寂しい味がするような気がするだけだ。

まるで最初に飲んだぼくの生まれ年のワインとはまったく正反対に。

時代物のワイン

<http://p.booklog.jp/book/41046>

著者：川路 新吉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bowmoq/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41046>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41046>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.